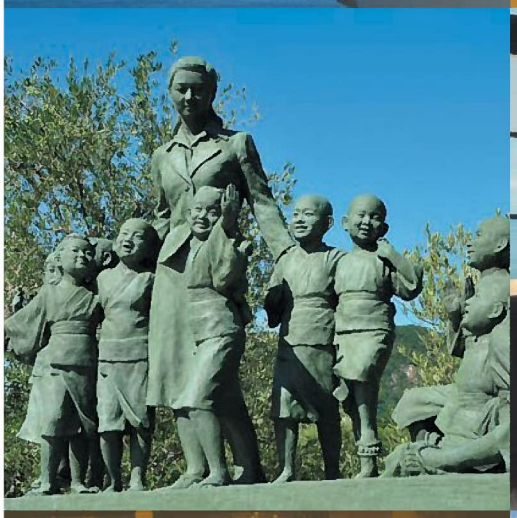
シリーズ●文学の舞台を旅する③

『二十四の瞳』壷井 栄
“島時間”を楽しむ
―小豆島



瀬戸内海に浮かぶ島、小豆島。その名前から小さな島をイメージする人も少なくないと思うが、その面積は153.3㎢、日本の島で19番目に大きな島だ。『二十四の瞳』の舞台や名産のオリーブ以外にも、ギネスに認定された世界一狭い海峡「土渕海峡」、1日２回の干潮時に現れる砂の道「エンジェルロード」、秋には紅葉の美しい「寒霞渓」など海や山の自然がたっぷり楽しめる小豆島での島時間を過ごしてみてはいかがでしょうか。

文学の舞台を旅する③

『二十四の瞳』壺井栄 〝島時間〟を楽しむ——小豆島

「二十四の瞳映画村」にある木造校舎の教室。リメイク版のロケで使用されたもので、教室の窓から美しい瀬戸内海の風景が見える。

映画のセットを活用した「二十四の瞳映画村」

昭和３年。女学校を出たばかりの“おなご先生”と12人の生徒たちの、第二次世界大戦を挟んだ18年間にわたるふれあいを描いたのが壺井栄の『二十四の瞳』です。暮らしに追われる12人の子どもたちの澄んだ瞳を「にごしてなるものか」と真正面から向かい合う女教師、大石先生。はじめは自転車で通うハイカラな先生を敬遠していた村人も、その熱心な教育ぶりを目の当たりにして、心を開くようになります。やがて、戦争の足音が聞こえるようになり、時代のうねりは村人の暮らしに濃い影を落とし始めます。

実は小説では、その舞台を「瀬戸内海べりの一寒村」と記しているだけで、場所を特定した言葉はいっさい出てきません。温暖な気候に恵まれた瀬戸内海の島、小豆島が『二十四の瞳』の舞台と結びつけられるようになったのは、小説が発表された２年後に公開された映画版『二十四の瞳』から。壺井栄の故郷から、物語の舞台を小豆島と設定し、撮影が行われたのです。脚本・監督は木下恵介、大石先生には高峰秀子。映画によって小豆島は有名になり、「ヒトミ・ブーム」という言葉も生まれました。

その後、昭和62年に朝間義隆監督によるリメイク版が公開。脚本は前回と同じく木下恵介、大石先生役を田中裕子が演じています。瀬戸内海を見渡す約１万平方メートルもの敷地を持つ「二十四の瞳映画村」には、このとき撮影に使用された男先生の家や漁師の家などのオープンセットが保存されていて、その近くには最初の映画の際にロケに使われ、昭和46年まで実際に使われていた「岬の分教場」もあります。

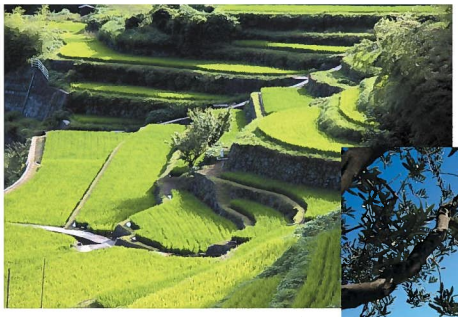
「二十四の瞳映画村」には、「壺井栄文学館」や映画館「松竹座」もあり、「松竹座」では高峰秀子主演の「二十四の瞳」を常時上映しています。また、昔懐かしい給食セットが食べられる「Café シネマ倶楽部」もあって、昭和の雰囲気漂う映画の世界を満喫できます。

小豆島の玄関口、土庄港では、到着した人たちを「二十四の瞳平和の群像」が迎えてくれる。

高台から見晴らす瀬戸内海の風景。島々の間を船が行き交い、のんびりとした眺め。

「瀬戸内海べりの一寒村へ、わかい女の先生が赴任してきた」

――壺井 栄 著「二十四の瞳」より



千枚田「中山の棚田」。750枚を超える美しい田が重なり合う風景は、日本の棚田百選にも選ばれている。

「小豆島 オリーブ公園」に建つ風車。姉妹島として提携するギリシャ・ミロス島との友好の証として、平成4年に建てられた。

小豆島マップ

春にオープンした書肆海風堂には高峰秀子ギャラリーが併設されており、映画・演劇などの本が多数並び人気を博している。

二十四の瞳映画村
住　所●〒761-4424
香川県小豆郡小豆島町田浦
電　話●0879-82-2455
入材料●大人(中学生以上)750円
小学生350円
営業時間●AM9:00～PM5:00(但し、11月 AM8:30～PM5:00)
休村日●なし

日本初、オリーブ発祥の地

小豆島は別名「オリーブ・アイランド」と称されるほど、オリーブ栽培が盛んな場所ですが、その歴史は明治時代にまでさかのぼります。

日露戦争に勝利した日本政府は、北方漁場の海産物を保存する方法としてオイル漬けに着目。国内でオリーブオイルを生産するため、明治41年、当時の農商務省が三重、香川（小豆島）、鹿児島の３県を指定してアメリカ産オリーブの試験栽培を始めました。しかし、三重、鹿児島の２県は実の生長が悪く、途中で断念。小豆島に植えたオリーブだけが順調に育ち、大正初めにはオイルが搾れるほどにまで実を付けるようになりました。

現在では、オリーブオイルはもちろんのこと、オリーブの実を使った塩蔵品や化粧品、オリーブの木を使ったクラフトなど、さまざまな商品が販売されています。「小豆島 オリーブ公園」では、毎年11月上旬から12月上旬にかけて、オリーブの搾油風景を見学できます（要予約）。

今年は３年に一度行われる現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭」も開催（秋期は10月８日～11月６日）。自然豊かな小豆島の風景の中に、さまざまな現代アートが展示されます。この秋は文学からアート、食まで楽しむことができる小豆島を訪れ、ゆったりとした“島時間”を過ごしてみませんか。

文学スポット

壺井 栄 文学館

壺井　栄

明治32年に醤油樽職人の子として生まれた壺井栄は、26歳で上京するまで小豆島で暮らしていました。「二十四の瞳映画村」にある「壺井栄文学館」には『二十四の瞳』の原稿のほか、愛用の品々が展示され、東京都中野区にあった自宅のいろりの間や応接間を再現した空間もあります。

写真提供・協力：香川県観光協会／小豆島観光協会／壺井栄文学館